

## 叙事詩マハーバーラタ前半部要約 「バガヴァッド ギター」が説かれるまで

時は、今から約五千年前のこと。現在のインドにあたるその地では、日夜戦乱が繰り広げられていた。諸国の王達は、常に自国の繁栄と平安を合言葉に、武力によって争い続けていたのだ。その中でも飛ぶ鳥を落とすかのごとく勢いを顕示した国があった。

それが、バラタ王国だ。

その国王の名は、パンドゥといい、文武両道に優れ、人望もある人物であった。実はパンドゥには、ドゥリタラーシタラという名の兄がいたのだが、彼は、不運にも産まれながらに盲目であった。当時の因習では、長男が王位継承権の上位であったが、やむなく王位の座は、その弟パンドゥに譲られていたのである。

優秀なパンドゥは、バラタ国王として、兄の分まで尽力を注ぎ治世に勤しんだ。そのかいあって、国民は戦乱の世にあっても平和に暮らすことができ、国は豊かになった。

そして、唯一、王を始め国民が望んだものは、次期国王となる息子のみであった。しかし、世の中は簡単には進まない。子を望むパンドゥ王と妃に、思ってもみない不幸が襲い掛かったのである。

### ● パンドゥ王の不幸、盲目の兄 ドゥリタラーシタラ王の幸福！

ある日、パンドゥは、森へ狩りに出かけた。しかし、そこには、彼の運命を決定的に変えてしまうほどの不運が待ち受けていた。

狩りの名手でもあるパンドゥ王は森の中で、雄鹿を見つけ迷わず弓を放ち、矢は見事に命中した。しかし、その雄鹿は、なんと聖仙が変化(へんげ)していた鹿であった。弓をうたれ、怒り狂った聖仙は、王に呪いをかけた。

その呪いは、もし女性と愛をいそしめば、即座にその命を失うというものだった。

予期せぬ不条理に誠実に役目を果たしてきた偉大なるパンドゥ王は、突然、不幸のどん底に落とされたのであった。

(ああ…もう自分は、妃と愛を交わすこともできず、子供を持つことなど、叶わぬことになってしまった…)

パンドゥ王の口からは、絶望の溜息しか聞こえなくなった。そして、国を治める気力など完全に失ってしまったパンドゥは、盲目の兄ドゥリタラーシタラに王座を譲り、クンティとマードリーという二人の妻を連れ、森へと向かい隠遁生活に入った。

遂に、盲目の兄ドゥリタラーシタラは、王の座をその手にした。

あきらめていた栄光の座が、向こうから転がり込んできたのだ。

(この幸福を、二度と手放すまい！)



盲目のドゥリタラーシタラには、ガンダーリーという最愛の妻がいた。彼女の両目には、布がきつく巻かれ、そのために何も見ることができなかった。それは、決して目が悪いためでは無く、盲目の夫への忠誠の証であったのだ。彼女がその美しい目を自ら閉じたのは、バラタ国に嫁ぐことが決まった時のことであった。

心優しいガンダーリーは、自分の夫となる男性が、不幸にも生まれながらに盲目であることを知ったのだ。

(彼はこれまでに光輝くこの世界を見たことがないんだわ。そして、これからもずっと…。)

哀れに思った彼女は、誰に助言されたわけでもなく自ら決意をし、生涯にわたり夫と同じ暗闇に身を置き、その思いを分かり合おうと決め自分の目を布で塞いだのだ。人々は、これぞ献身的妻の手本であると賞賛した。

ドゥリタラーシタラの耳にも、その逸話は届いていたが、正直なところ半信半疑であった。しかし、嫁いできた彼女の顔を触ると、その目には、布がきつく巻かれていた。「これからずっと、あなたと暗闇をともにします。この布は何があっても、もう解かれることはありません。」

彼女にこう告げられ、王は、感激で胸が熱くなった。ここまで自分に同情してくれた人が、これまでいたであろうか…盲目の王は感涙でむせび泣きをした。

## ● バラタ国の子供たちの誕生

ドゥリタラーシタラが、バラタ国の王位について数年がたったある日のこと、二人に、突然驚くべき知らせが入った。なんと、王座を退き森へ隠遁した息子を持たないはずの弟パンドゥに、ユディシティラという名の男の子が産まれたというのだ。どうやら、パンドゥと共に森に入った正妻クンティは不思議なマントラを持っており、神々の子を自分の子として産むことができるらしいのである。その長男は、彼女に呼び寄せられたダルマ神から授かったとの噂も聞いた。

ドゥリタラーシタラは、驚きと悲しみのあまり気を失った。実は、ガンダーリー妃も、三年前から身籠ってはいたのだ。しかし、いっこうに出産には至らず深刻に悩んでいた。

(子を宿そうとすれば死が待ち受ける、そんな厳しい呪いを受けた前王パンドゥには男児が授かったのに、何故自分は、こんなざまなのであろうか？夫は、ずっと自分の子を待ちわびているのに…)

焦りを覚えた彼女は、あろうことか妊娠中である自分のお腹を棒でなぐりつけ、無理やりに出産をしてしまった。しかし、この暴挙により彼女から産まれたものは、到底生き物とは思えない「黒い大きな塊、であった。目隠しのため何も見えなくとも、従者たちの驚きの声から、彼女はその異様な様子を悟り愕然とした。

そんな悲劇の場へ偶然にも助けに現れたのが、聖者ヴィヤーサであった。状況を察した慈悲深い彼は、ガンダーリーの産みおとした醜い塊を百片にくだき、それぞれを壺に入れた。

「時期がくれば、ここから子供達が産まれてくるであろう。安心なさい。」

聖者は、そう言い残しその場を去った。幾月か過ぎ、森に住むパンドゥには、二人目の男子の子ビーマセーナが風神を父として誕生した。そして、運命の悪戯か、その丁度、同じ日の夜、バラタ国宮殿では、壺から百人の息子達が産まれた。ガンダーリーが、その中から一人の赤子を抱き抱えた。長男ドゥルヨーダナの誕生である。すると、外では狼が遠吠えをあげ始め、昔から人々が悪い予兆と恐れる出来事が次々と起こり始めた。

大臣や従者達は、ガンダーリー妃にと強く進言した。

「この恐ろしい予兆の数々は、その子が国を滅ぼしてしまうことを告げております。どうか堪えて頂き、その子を今すぐ手放してください。」

しかし、彼女は全く耳をかそうとしなかった。バラタ国の運命はこの時から嵐の中へと巻き込まれた。

一方、森で隠遁生活を続けたパンドゥは、妻クンティのマントラのおかげで二人の息子を得た後、インドラ神を呼び三男にアルジュナを得た。クンティが唱えたマントラにより神々が次々と顕れては、輝ける男児が授けてくれる様子にパンドゥは歓喜した。しかし、その様子を淋しそうに見ていたのは、一緒に森にやってきた第二夫人のマードリーである。彼女には、クンティのような神々の子を得られるようなマントラなどない。パンドゥは、妻クンティに頼んだ。



「おお、クンティよ、できればマードリーにもそのマントラを教えてあげてくれないか？私は、彼女が可哀そうで見えておられぬ。どうか、一度だけお前の秘術を使わせてあげておくれ。」

クンティは渋々了承した。

こうしてマードリーは、一度だけ奇跡のマントラを使うことを許され、すぐさま神々の医師である双子のアシュヴィニ神を心に念じた。願いは成就し彼女は、端麗な双子ナクラとサハデーヴァを、自分の子として産みおとし最上の喜びを得ることができた。

パンドゥは、五人の息子を得てすっかり気をよくしていた。そんな彼は、ある春の日に暖かな陽気に誘われたのであろうか、自分を束縛する呪いを知りながらも心浮かれ、マードリーと愛を楽しんだのであった。彼は運命には逆らえず、すぐに天国へと旅立った。悲しみに沈んだ第二夫人のマードリーも、彼の後を追って他界した。

## ● ドゥルヨーダナの嫉妬と怒り

月日は経ち、バラタ国の都では、ドゥルヨーダナを始めとする百人の息子達が、立派な少年に成長した。可愛い息子達の声聞きながら暮らすことは、父として、また王として至福の喜びであった。国の明るい未来を思い描くドゥリタラーシタラに、あるメッセージが届いた。それは、亡き弟パンドゥの正妻であり、現在は森で暮らしているクンティからのものだった。



彼女は、亡き夫の忘れ形見である五人の息子達—長男ユディンティラ、次男ビーマー、三男アルジュナ、双子のナクラとサハデーバーを連れて、このバラタ国へ戻りたいと申し出てきた。

クンティは、王家の血を引く自分の子供達が、何の理由もなくこのまま森に住み続けるなど受け入れ難いことであった。父親パンドウが他界した後、子達の将来を考えれば故郷バラタ国へ戻って、クシャトリアとして立派に成長させてやりたいと考えるのは、母親として当然であろう。この件を耳にしたビーシュマを始めとした国の大臣達や国民は皆大いに喜んだ。バラタ国では、前王パンドウの亡き後も、その人気は衰えてはおらず、その伝説の王の息子達には、自然と期待が寄せられるのであった。

結局、ドウリタラーシタラ王は、寛大な返答をクンティにした。  
「弟の子供であっても、我が子同然に可愛がって育てる。」

しかし、この言葉は建前であり、彼の本意では決してなかった。ドウリタラーシタラ王にしてみれば、自分の長男ドゥルヨーダナより愛しい子供はいない。バラタ国は、絶対に彼に譲ってやりたいのだ。だからといって、その気持ちを大っぴらにできはしなかった。彼は、自分に自信がなく、周りの目がとても気になった。不安に囚われた弱き心のドウリタラーシタラ王は、それ故、いつも言葉と心が裏腹であり、苦悩が絶えないのである。国王の長男ドゥルヨーダナも、父ドウリタラーシタラ王が、いかにその座にしがみついているかは良く分かっていた。父は、盲目であるハンディもあって、幼い頃から弟に華やかな道を譲ってはいしたが、心の中では、自分も人々から褒めそやされたいと羨ましく思っていたのだ。運命のいたずらか、諦めていたはずのその地位が突然に手に入れば、人間であれば誰しも手放したく無いと思うのは、当然であろう。父は、腕力はとても強い、しかし、その心は、とても臆病なのだ。王でありながら、人前では、決して自分の思いを主張したりすることは無いのだから。部下の反感を買えば、いつこの座を追われるか心配でならないのかも知れない。自分の息子に対しても溺愛するばかりで、躾や教育もままならず、無理難題を言われても結局最後には全て許してしまう…。

ドゥルヨーダナは、そんな父親を齒がゆく思いながら、一方で、愛すべき気の毒な人であるとも感じていた。そして何よりも、自分はその国王の子供なのだ。ゆくゆくは、この国の国王とならねばならない。その自尊心の強さが、彼の救い難い欠点でもあった。

そして、ついにドゥルヨーダナにとって運命の日がきた。クンティとともに、輝ける五人兄弟が、国民の盛大な歓声を受けながら都へ戻ってきたのだ。  
「パーンダヴァ(パンドウの子供達の意)に栄光あれ！これで、バラタ国の繁栄は約束された！」  
人々は、連呼した。

“自分の息子達と同等のように扱う、”というドウリタラーシタラ王の約束通り、パーンダヴァ兄弟は、ドゥルヨーダナら百人の兄弟達と一緒に教育を受けることとなった。評判通り、彼らは、聖典の学識、武術、人間性、容姿等全てにおいて、他を寄せ付けないほど優秀であった。それもそのはずである。彼らの父親はそれぞれ、ダルマ神、風神、インドラ神、アシュヴィニ双神

という天界の神々なのだ。バラタ国の長老ビーシュマは、祖父がわりとなって彼らを可愛がり、武術の導師ドローナも彼らの武人としての素養に目を細め、あらゆる手ほどきを惜しまなかった。

この状況にドゥルヨーダナの敵愾心に火がつかない筈がない。彼は、心の底からパンドヴァ五人兄弟を憎んだ。

(奴らの顔を見ているだけで、腹が立つ！前王パンドゥがなんだというのだ！)

現王は、我が父ドゥリタラーシタラだ。そしてもちろん、次の国王はこの俺だ！)

ドゥルヨーダナの心には、パンドヴァ兄弟に対する怒りが、抑えきれないほど湧き上がってくる。その思いに支配されたドゥルヨーダナは、彼らを絶対に殺そうと次々と残虐な罠を仕掛けた。ある時は、毒を吞ませ溺れさせようとし、またある時は、家に火を放ち全員を一気に焼き殺そうと画策した。しかし、ドゥルヨーダナの計画は、全て失敗に終わった。

息子の暴挙を諫めることなく、ドゥリタラーシタラ王は、穏便な解決法として、青年となったパンドヴァ兄弟達に国の僻地の荒れはてた土地を分け与えた。

(せめて、地方で静かにしていてくれれば…)

しかし、盲目の王の願いは、実らなかった。

神々の子、亡き伝説のパンドゥ王の息子達は、実力と運に恵まれ彼らがゆくところは、如何なる処でも華やいだ。多くの聖者や宗教者は、謙虚で賢明な彼らに未来の栄光が授かるように祈念をした。彼らと親交を深めたいと望む他国の武将達は後を絶たず、瞬く間にバラタ国の荒れ地には、絢爛豪華な宮殿が築きあげられ、人々からの贈り物で溢れかえった。パンドヴァ兄弟の長男ユディシティラは、クシャトリヤには稀なほど、純粋で優しい人柄であり、法を絶対順守する正義の武将であった。彼こそ、世界の王に相応しい、世界の皇帝としての祭式を執り行い天下に知らしめるべきだと人々は口々に褒めそやした。彼らの街はインドラプラスタ(現在のデリー)と呼ばれ、ドゥリタラーシタラ王の都を完全に凌ぎ、その繁栄は約束されたかのようにであった。

噂に聞くインドラプラスタの宮殿を訪ねたドゥルヨーダナは、その豪華さに息を飲んだ。そして、山と積まれた贈り物を妬ましそうに睨んだのだ。宝石のように輝く回廊を歩いていた時、彼は不覚にも足を滑らせた。

「全くめくらの子はめくらだな！父親と同じように目が見えず足を滑らせたか、ハハ…」

(あの声は、ビーマセーナだな！)

容赦なく自分を卑下する声の先には、思った通りビーマセーナが高笑いする姿が見えた。その横では、清廉な彼らの共通の妻ドラウパディーも笑っている。彼女は、ドゥルヨーダナがかつて恋心を抱いて妻に娶ろうと諸王達と競った女性でもあった。恋い焦がれた女性が自分の目の前で、アルジュナを選び花輪を彼の首にかけた時には、地団駄を踏み悔しい思いをしたことを彼は、忘れたことはなかった。

よくよく考えれば、ドゥルヨーダナがこれまでにパンドヴァ兄弟に仕掛けた悪行に比べれば、たわいもない軽はずみな言葉に過ぎないだろう、しかし、ドゥルヨーダナの胸に深く突き刺さったこの言葉の棘を抜くことは、もはや不可能であった。

## ● 因縁を生んだ決定的な出来事

「奴らにこれ以上、いい思いをさせてなるものか！」

パーンダヴァ兄弟達に屈辱をあびせ、なんとか一泡ふかせてやりたいと、ドウルヨーダナは叔父のシャクニと結託し、ある謀略を仕掛けた。

博打好きなパーンダヴァ兄弟の長男ユディシティラに賭け将棋を挑み、大衆の面前で全てを奪い取ってやろうと考えたのだ。叔父のシャクニは、自分の思った通りのサイコロの目を出せるゲームの達人である。いくら賭け将棋が好きだと言っても、所詮、ユディシティラは素人である。修羅場をくぐったシャクニに、もともと歯が立つわけはなかった。しかも、伯父のシャクニもパーンダヴァ一族に恨みがあり、心底から彼らを滅亡に追い込みたいと思っているのだ。彼は執念の呪いをこめ勝負に使うサイコロを自作した。



シャクニとユディシティラの賭け将棋の話題は、国中に広まった。バラタ宮殿の集会場は勝負場にかわり、大勢の観衆が見守る中、ユディシティラとシャクニは対峙した。

二人の間で、運命のサイコロが振られていった。イカサマといっても過言ではないこの勝負は、既に先が見えていた。ユディシティラは、一度も勝てず悉く完敗していった。

「次は何を賭けるのかな？まさか、天下に名高い貴方が、たかがサイコロのお遊びから、おめおめと逃げるおつもりでは、ありませんまい？」

ユディシティラは、シャクニに踊らされ次々と自分の財産をかけ勝負に挑んでいった。しかし、一度も勝てず、かんぷなきままでに叩きのめされ、全財産を失ったのだ。自分の思い通りに勝てないユディシティラは、頭に血が上り我を忘れていた。

「まだ、他に何か賭けるものはありますか？」

シャクニに詰め寄せられ、何も無くなった彼は、勝負をあきらめるところか、事もあろうに大事な兄弟を賭けに差し出した。

「ここに、我が弟ナクラがいる。彼を賭けよう。」

観衆は息をのみ、声もでなかった。そして、無情にも、サイコロは、シャクニの思う通りに操られユディシティラは負けた。

「私には、弟サハデーヴァがまだいる。彼を賭けるぞ。」

サイコロは振られた。

「私の勝ちのようすな。」

口の端を持ち上げ冷たい目でシャクニは言った。

「マードリー夫人の忘れ形見だけを賭けては、不公平ではありませんかな？」

ユディシティラは、震えながら

「わかっている…次は、アルジュナを賭けよう。」

集会場がどよめいた。緊張の中、またしても彼は負けた。

アルジュナはシャクニの手に落ちた。

「まだ、私にはビーマセーナがいる。」

しかし、ユディシティラは完敗し、兄弟すべてを失った。

「さて、まだほかに賭けるものは、お持ちかな？」

やけくそになったユディシティラは、とうとう自分自身を賭けの代償に差し出した。

「この私自身をかけるぞ！」

しかし、奇跡は起こらず、ただひたすら負け続けた。彼の命は、もはや自分のものでは無くなった。

「あなたが持つておられるもう一つのものをお賭けになり勝負に勝てば、あなたも兄弟も自由になれますよ。如何かな？」

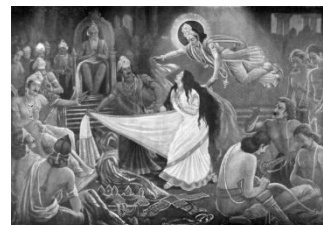
正気の沙汰を失ったユディシティラは

「私には妻ドラウパディーがいる。彼女を賭けるぞ！」

常軌を逸した彼の発言に、遂には天も見放した。群衆からは、軽蔑と不満の声が漏れ聞こえてくる。サイコロは振られた。勝負はもちろんシャクニの勝ちであった。ユディシティラには、もはや勇者の片鱗もなかった。そこには、容赦なく全てを奪われた若者が、ただ真っ青な顔をして肩をがっくりと落として座っているだけであった。

「ドラウパディーは俺達のものだ！ここへ連れてきて、奴らの前で弄んでやれ！」

何も知らずに夫の帰りを待ちながら、部屋で休んでいた美しい彼女を、興奮したドウルヨーダナの弟が、強引に勝負場に引きずり出してきた。そして、あろうことか大衆の面前で彼女の服を剥ぎ取りだした。彼女は、泣き叫び必死に抵抗した。ビーマセーナやアルジュナに助けを求めたが、彼らは、唇を噛みしめ、肩を震わせながら耐え忍んでいるだけで、彼女を助けることはなかった。信じていた夫達から見放され、為す術を失ったドラウパディーの心にクリシュナ神の顔が浮かんだ。彼女は、剥がされそうになっている衣を必死に拒み掴んでいたその手を放し、両手を合わせて合掌し、全てを委ねてクリシュナ神へ助けを求めた。



奇跡は起きた。彼女の衣を剥いでも、剥いでも、それは途絶えることなく山のように積み上がっていった。欲望に狂った野蛮な男もとうとう力尽き諦めた。クリシュナ神の御加護により、清楚なドラウパディーは、理不尽な辱めを受けることを紙一重で免れたのだ。この奇跡の出来事に促されるかのように、ついに盲目の王ドゥリタラーシタラが、口を開いた。彼は、この一連の出来事が、一族の破滅になりかねないと察し、なんとか丸く納めようと試みた。

「お前達、この勝負は無かったことにしなさい。さあ、もう終わりだ。私の息子達の悪ふざけをどうか水に流しておくれ、パーンダヴァ達よ。ドラウパディーよ、早くお帰りなさい。お前達の失ったものは、すべて返そう。持ち帰り、今まで通り、幸せに暮らしておくれ。息子ドウルヨーダナよ、もうよせ、やめるのだ。神様の怒りをこれ以上買う前に…」

勝負は、王の言葉で無効となり、敗者パーンダヴァ兄弟達は静かに退場していった。

しかし、ドウルヨーダナは、納得がいかなかった。

「父上、奴らを完全に封じ込めていたのに、なぜ弱きになってしまったのです。勝負に情けは無用。ましてや我らは、クシャトリヤのはず、武人たるものが敵に塩を送っては国の繁栄など

保てはしません。今すぐユディンティラを呼び戻し、もう一勝負だけさせてください。これは、我らの未来が懸っているのです！」

盲目の王は、結局、息子に押し切られた。

## ● 避けられなかった運命の再戦

重々しい様子で帰路につくパーンダヴァ兄弟達のもと、ドウルヨーダナが馬を飛ばしてやってきた。

「待て、ユディンティラ！このままでは、後味も悪かろう。どうだ、もう一度だけ最後のひと勝負に賭けようではないか。今度は、財宝でもお前の兄弟でもない。負けた方の一族が、十三年の間、バラタ国から去り隠遁生活をするのだ。そして、その最後の年は、行方や素性を隠して過ごすのだ。もし、その間に発見されてしまえば、続けてもう十三年間、都へは戻れないルールとしよう。まさか、ダルマの男と呼ばれたお前のことだ、怖気づいて挑まれた勝負を放棄するなど、クシャトリヤの掟に背きはしないよな？」

「もちろんだ、受けてたとう。」

ユディンティラは、逃れることができない大きな流れの中に自分がいることを感じていた。それこそ、運命と呼ぶべきものかもしれない。これは、誰にも止められないのだ。彼は、覚悟を決めた。

ユディンティラ達は、修羅場と化していたあの忌まわしい勝負場に戻った。シャクニは、冷淡な微笑みでユディンティラを待ち受けていた。賽は振られた。ユディンティラがいくら頑張っても、思い通りに賽の目を出せるシャクニに勝てるわけではない。この勝負は、始めから結果が分かっているイカサマなのだ。ユディンティラは、シャクニに何の文句もつけず、ただ持てる力を持って正々堂々と勝負に挑むが、いくらその心が純粹であっても勝つ術は全くなかった。

そして、彼は、負けた。正義の武将パーンダヴァ兄弟がバラタ国を去る

約束通り、パーンダヴァ兄弟とドラウパディーは、繁栄の象徴となるはずの自分達の宮殿を離れ、潔く国を立ち去り森の中で暮らし始めた。

「兄上、なぜこんな約束を守らねばならないのですか？納得がいきません。戦士たるもの剣で勝利を勝ち取りましょう！」

次男ビーマセーナは、やりきれない怒りをもって抗議した。

「落ち着くがよい。戦士ならばこそ、法を守るべきなのだ。一度交わした約束は、理不尽であっても、守りとおすのがダルマだ。今は、耐える時なのだ。」

ユディンティラは、兄弟達に耐え忍ぶよう諭しながら、十二年の間、森で暮らした。十三年目を迎えた。これから一年間は、ドウルヨーダナ達に見つからないように、姿を隠さね



ばならなかった。彼らはクシャトリアであることを捨て、変装し、完全に素性を隠してマッツヤ国王の近くで仕えながら、時の過ぎ去るのを待っていた。

ドウルヨーダナは、スパイを各地に出しパーンダヴァ兄弟の行を探し続けた。

そして、どうやらマッツヤ国が怪しいという情報を掴んだ。マッツヤ国は、以前から攻めるつもりではあったし、もしそこに、パーンダヴァ兄弟達がいれば一石二鳥だ。

ドウルヨーダナは、兵を出し攻め入った。

バラタ族の大群にマッツヤ国の王子は勇んで立ち向かった。しかし、彼は、まだ戦いの経験の少ない若者であった。砂塵を巻き上げ迫ってくるバラタ族の兵団をいざ目の前にすると、その迫力に怖気づいてしまった。体を震わす王子に、化粧をし、女性のような衣服を身に付けた一人の宦官が声をかけ励ました。

「王子様、さあ、敵はすぐそこです。立ち上がって戦ってくださいませ。」

「私が死んでしまったら、母上はなんと悲しむであろうか？私は、大好きな母上を悲しませたくはない、戦うのは厭なんだ。」

見かねた宦官は、こう言った。

「わかりました。私がドウルヨーダナの軍と戦いましょう。あなたは、馬の手綱を持ってください。そして、手柄はすべてあなたのものにしてくだされば結構ですよ。」

マッツヤ国の王子は、驚いた。見るからに、か弱そうな女装をした宦官が敵と戦うと言うのだ。

(軽々しくも馬鹿げたことを言う、おかしな奴だな…)

王子は、不思議そうに相手の顔をまじまじと見た

「王子、実は、私はパンドウ王の息子アルジュナと申します。今まで、素性を隠し貴方を騙すようなことになってしまい、申し訳ありません。この一年の間、私の兄弟達は、変装して身を偽り、あなたのお城で密かに住んでおりました。王子、マッツヤ国の窮地、是非お力になりたいと思います。どうか、ご安心ください。必ずやこの私が、敵を倒して御覧にいれましょう。」

王子は、目を見開いて驚いた。目の前にいる宦官は、女装したアルジュナだったのだ。

ドウルヨーダナが攻めてきたこの日、ちょうど約束の十三年目が終わった時であった。もう、誰にも遠慮することはない。アルジュナは、遂に立ち上がった。華隠しておいた弓を持ち、馬の手綱を華麗にさばきながら、矢を次々と放った。常人離れしたその早業から、すさまじい数の矢が放たれた。無数の矢は途切れることなく、太陽の光を遮って戦場を暗くするほどであった。伝説の勇者アルジュナは、復活した。弓を放つ神々しい姿に王子を始め人々は感動し、勇気がわきあがった。

驚いたのはドウルヨーダナ軍であった。眼の前に突然、アルジュナが出現したのだ。シヴァ神の神弓が次々と放たれ兵士達に襲いかかった。一旦怯んでしまった編隊は、もう立て直すことは不可能となった。ドウルヨーダナが自軍を見直すと、先頭となるべき將軍ビーシュマやドローナは、見事に復活したアルジュナの姿を見て喜んでいるようにも見えた。

「くそっ、退却だ。アルジュナめ！」

ドウルヨーダナ軍は、退散した。バラタ国へ戻ったパーンダヴァ兄弟パーンダヴァ兄弟とドラウパディーは、十三年の間、バラタ国を離れて暮らし見事に約束を果たして戻ってきた。彼らは、やっと自分達の宮殿で暮らせるかと思い胸をなでおろして喜んだ。しかし、ドウルヨーダナは、怒り狂ったように言い放った。

「お前達に針の先ほどの土地もやる気はないぞ！どこかへ失せてしまえ！それでも、もし、お前達がこの国に住みたいならば、もはや戦うしかあるまい。戦争だ！俺に見方してくれるものは、他国にも大勢いる。お前らごとき少数など、あっという間にひねりつぶせるんだぞ！」

ドウルヨーダナが、パーンダヴァ兄弟に宣戦布告をしたと聞き、諸国の王はすぐさま動きだした。ドウルヨーダナ率いるカウラヴァ軍は、バラタ国の正規軍を率い大軍である。彼らに味方したいと名乗り出る王は多かった。そんな中、ヤドゥ族の王クリシュナが、ドウルヨーダナとドゥリタラーシタラ王の住む宮殿を訪れ、愚かな戦いを避け和解するように説得を試みた。クリシュナの神懸りの武勇伝は、広く知れ渡っている。しかし、欲に振り回されたプライド高い武将達の殆どは、クリシュナに一応の敬意を払うものの、神として崇めはしなかった。和平交渉の際にも、クリシュナは神としての姿をドウルヨーダナ達に見せて納めさせようとまでしたが、その光は彼らには眩しすぎ目をあけることができず、成就しなかった。クリシュナの尽力を持ってしても、この戦いは避けようの無いものであったのだ。

ユディシティラも、悩みに悩んだ。これまで幾度となくドウルヨーダナの仕打ちに耐えてきた。命の危険を感じたこともあった。しかし、従兄弟同士が争うなど、まったく愚かなことだと思い、我が弟達と我慢をしてきたのだ。

「兄上、もう我慢する必要はありません。我らには、何の落度もありません。何故、バラタ国に住めないのですか？いや、たとえ、他国に移り住んでも、いずれドウルヨーダナは、我らを殺しにくるでしょう。彼は、私達の息の根を止めないかぎり、安心できないのですから。ドウルヨーダナに味方するものがあれば、我らにも援軍となってくれる人々もいるはずです。大義は我らにあるのです。クシャトリアとして、戦いの道を選ぶことが正道と信じます。」

これまで苦難を共にしてきたユディシティラの四人の弟達は、皆、戦うべきであると決意した。そして、ユディシティラも覚悟を決めた。

## ● クリシュナのもとを訪れたドウルヨーダナとアルジュナ

味方を増やしたいアルジュナは、クリシュナのもとへ急いだ。彼が率いるヤドゥ族は、太陽の王朝の中でも強力な戦士達がそろっていた。しかも、彼の母クンティは、クリシュナの父親と兄妹の間柄であった。従兄弟にもあたるクリシュナは、森で隠遁している間も何度も訪ねて来て、影となり日向となって励ましてくれたのであった。アルジュナがクリシュナの部屋に着いた時、そこにはすでにドウルヨーダナがいた。彼もクリシュナを味方に引き入れようとしているのだ。アルジュナに一瞥をくれたドウルヨーダナは、我先にと部屋の扉を開けた。クリシュナは、ベッドで眠りについていて、ドウルヨーダナは、クリシュナの横に立ち、アルジュナは、クリシュ

ナの足元で膝まづいて座り、彼が眠りから覚めるのを待った。やがて、クリシュナが目をあけると、まず先に足もとにいるアルジュナの姿が目に入った。ドゥルヨーダナがすかさず言った。「クリシュナ！私の話をまず聞いてください。私がアルジュナより先にここへ来ていたのですから。」

「まあ、待ちなさい。私の目に先に入ってきたのは、アルジュナだ。彼の話から聞くことにしよう。どんな用かな？」

「クリシュナ様、我が軍と共に戦っていただきたく今日はそのお願いにあがりました。」

ドゥルヨーダナが続いた。

「私もそのお願いに参りました。どうか我が軍に加勢してください。お力をぜひ！」

「君達の願いは分かったよ。では、こうしよう。私を選ぶか、私の軍を選ぶか、考えなさい。しかも、私は決して直接戦わず御者として仕えよう。私のヤドゥ軍に、私はいないが、武器も兵団もすべて支配してよい。彼らは、強力だぞ。さあ、アルジュナ、お前はどちらを選ぶ？」

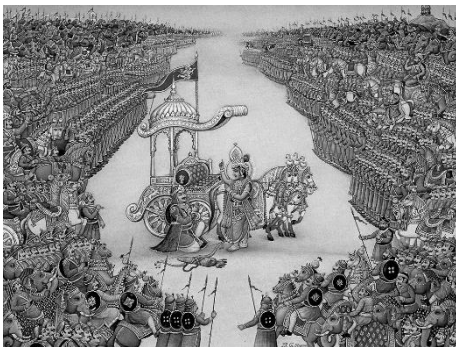
「クリシュナ様、迷うことなく、お一人である貴方を選びます。」

ドゥルヨーダナは、アルジュナの答えを聞いて、ほくそ笑んだ。  
(どこまでも馬鹿な奴だ！これで、ヤドゥ軍は俺のもの！)

「では、私は、あなたの軍隊と武器を選ばせていただきます。」

アルジュナを選んだのは、神と叡智であった。そして、ドゥルヨーダナを選んだのは、物と力にすぎなかった。彼は、真に有益となるものが、分からずじまいであったのだ。

## ● バガヴァッド ギター第一章 クルクシェートラの戦い



遂に聖地クルクシェートラ(現在のインドの首都デリーから北へ約100km)にパーンダヴァ軍とドゥルヨーダナ率いるカウラヴァ軍が睨みあった。

ドゥルヨーダナの嫉妬と怒り、ドゥリタラーシタラ王の弱さが原因となって生じたこの大戦争は、結局誰にも止めることはできなかった。それは、時代の終焉に、起こるべくして起こった悲劇としか言いようがないものであろう。

今や戦いの火ぶたが切られようとするこの時、盲目の王ドゥリタラーシタラ王は、バラタ国の宮殿にいた。可愛い我が子が、クリシュナが味方したパーンダヴァ軍と命をかけて戦おうとしているのだ。落ち着いてなどいられるわけがない。目が不自由なドゥリタラーシタラ王は、戦場の様子を詳しく知りたいと願い、千里眼を持つ大臣サンジャヤに、こう尋ねた。

盲目の王ドゥリタラーシタラは、言った。

「おお、大臣サンジャヤよ、ダルマの地、クルクシェートラに戦うために集まった、私の者達とパーンダヴァは、どうしておるのか？」(第1章1節)

サンジャヤは、答えた。

「王様、あなたの息子ドウルヨーダナが率いるカウラヴァ軍は、将軍ビーシュマを大將軍として指揮にあたらせ、武術の達人ドローナを筆頭にした無敵の陣形を整えております。一方、パーンダヴァ軍は、アルジュナやクリシュナが法螺貝を吹き鳴らし、味方の戦意を盛り上げておりますね。そして、アルジュナが御者のクリシュナに命じて、戦車を前に出させました。どうやら、対決するドウルヨーダナ軍の顔を間近に見ようとするつもりなのでしょう…。」

そのアルジュナの目に入ってきたのは、親愛なるビーシュマの顔であった。これまで、祖父のように慕ってきた彼が、今や敵の先頭にたっている。

彼はアルジュナにこう語っていた。

「この戦いにおいて、お前達が正しいのは明らかなことだ。しかし、私は、今のバラタ国の体制に仕える身なのだ。さあ、堂々と戦い、私を倒してゆきなさい。君達の祝福を祈っているよ。その横には、幼いころから武芸の指導してくれたドローナ師がいる。彼も将軍ビーシュマと同じ思いであった。彼らこそ、尊敬すべきクシャトリヤであり、アルジュナにとって、かけがいのない最高の存在であった。アルジュナは、狼狽し、戦意を失った。クリシュナは、そんな彼を見て、励ました。

「大丈夫かい、ここまで来て逃げることはしない方がいいよ。君のこれまでの名声は、地に落ち卑怯者と呼ばれるだけだから。戦いを恐れず立ち向かいなさい。」

しかし、アルジュナは、単なる臆病風に吹かれ、戦いを恐れているのではなかった。戦うために自分は、ここに来た。この戦いは、間違っていない。しかし、ビーシュマやドローナを自分が殺してしまうのだと考えると苦しくてやりきれない。かといって、逃げることもつらい。自分が選ばねばならない行為は、どちらも正しい。しかし、どちらも悲しみだけが残る。こんな苦しみはもういやだ。人間には幸せや自由を永遠に得ることは無理なのか？なんのために人は生きるのだ？こんな人生など、意味はあるのか？ああすべてがもう厭になった。クシャトリヤなど捨て、出家して山にでも籠りたい気分だ…。混乱で、もう力がでない…。アルジュナは、馬車を降り、クリシュナに懇願した。

「私は、弱気に取りつかれ、何をすべきか判りません。戦うべきか、それとも戦わざるべきか、私にとって、どちらが良いことなのか、はっきりと教えてください。あなたを頼りとする私に教を…、私は、あなたの弟子であります。私には、感覚器官を枯渇させるこの苦しみを、取り除く方法が判らないのです。」

この言葉を聞き、クリシュナ神は微笑みながら喜んで、アルジュナへ、叡智の教を説き始めたのであった。聖典バガヴァッド ギータ—は、こうして戦場の緊張の場で説かれたのである。

～以上、叙事詩マハーバーラタ前半部 要約を終える。～